

比較文化Ⅱ [第4回]

丸山純 (jun@site-shara.net)

●パキスタンの北西辺境に位置するチトラル県

◆チトラルの位置と風土

パキスタンのパフトゥーン・フワ州（旧北西辺境州＝North West Frontier Province）の北西端、アフガニスタンに接して広がる

ヒンドークシュ山脈の最高峰ティリチミール（7708m）を擁する山国

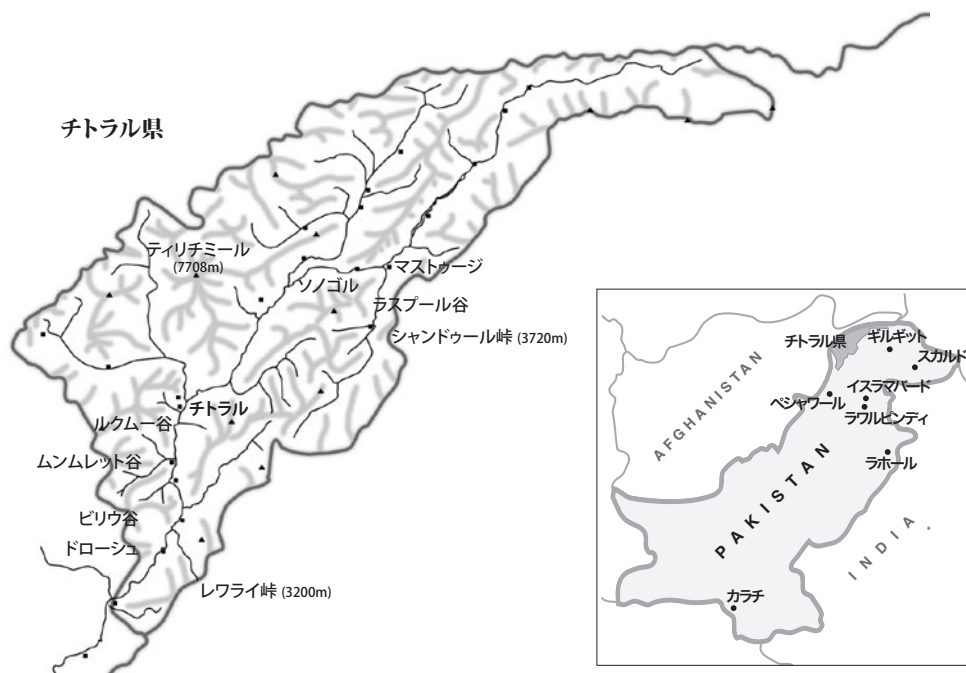
県庁とバザール（市場）のあるチトラル（チトラル・プロパー）の標高は約1500m

年間降水量は東京の約1割（100～300mm）と極度に乾燥している砂漠的景観の土地

◆チトラルの住民

人口は約22万人で、コー（Kho）族と呼ばれる（いくつかの民族が混血してコー族に）

南部の下チトラル地方は、イスラームの主流であるスンニ派がほとんどを占める



北部の上チトラル地方には、シーア派の分派のイスマイリ派が多い

最近では、イスラーム“原理”主義が伸張し、両者の対立も深まる

◆チトラルの言語

チトラル全域で使われているコワール語（Kho + war：言葉）は、インド・ヨーロッパ語族インド・イラン語派のインド語に属し、ダルド諸語と呼ばれるグループを構成する

コワール語には文字はない（話し言葉のみ）

◆チトラルの歴史

かつては非イスラームの「カーフィル（異教徒）」が居住していたが、13世紀末にイスラーム（イスマイリ派？）のライース王家がカーフィルを打ち破り、王朝を築く

住民の大多数はイスラームへと改宗したが、一部はチトラル南部の幾つかの谷に孤立して伝統的な多神教を守り通した → 今日のカラーシャ族

16世紀末にティムール帝国の王族の末裔であるカトゥール王家（スンニ派）がアフガニスタン西部からやってきて、ライース朝を倒し、藩王国となる

1895年、カトゥール王家の跡目争いに英国が介入

英国の宗主権の下に設置されたマラカンド行政区の一部になる

1901年には英領インドの北西辺境州に組み込まれ、英国統治下のインド政府直轄地に

第二次大戦後の1947年、インド・パキスタンの分離独立の際にパキスタンに帰属

1969年には完全にパキスタンに併合され、1972年に藩王制が廃止される

●チトラルのイスラーム

◆典型的な田舎（地方）のイスラーム社会

敬虔なイスラーム教徒が多く、都市部と違ってきわめて保守的

最近では原理主義的な聖職者の力が強くなり、監視の目が光っている

女性は自由には外には出られず、外出時にはブルカを着用し（車に乗る際はショールだけの場合もある）、身内の男性と共に行動する

バザールを歩いても、男ばかりで、女性の姿は皆無

女性だけが入れる「女性のための店」をNGOが手助け。生まれて初めて買い物を体験

◆地政学的なアイデンティティ

東のインドと西のペルシャ（イラン）という二大文明圏にはさまれ、さらに南から強力なパシュトゥン族（現在のアフガニスタンの主力民族）の圧力にさらされてきた

そのため、パキスタン人（パンジャーブ人）ではないという意識を持ちながら、アフガン人やパシュトゥン族に対しても対抗意識を持つ

コワール語には文字がないので、ペルシャ語を用いて公文書を書いていた

パキスタンの公用語のウルドゥー語を使うようになったのは、70年代ぐらいから

◆イスマイリ派という特殊性

歴史的に、シーア派のイスマイリ派が多い地域

南部はスンニー派、北部はイスマイリ派が大多数を占める

比較的、戒律が緩い

家族以外の男性の前でも、女性が顔を隠さない

飲酒・喫煙（大麻）などにも寛容

音楽が身近にある

●チトラルの音楽

◆職業的音楽家の音楽

ドム（dom）と呼ばれる音楽家集団が演奏する器楽。歌は伴わない

王制時代には王家に所属し、さまざまな儀式音楽を演奏

両面筒型太鼓「ドール」（dohl）、二組一対鍋型太鼓「ダママ」（damama）、オーボエ系の管楽器「スルナイ」（surnai）が1セットとなって演奏される

ドムは社会的には最下位のカーストに属し、鍛冶屋などを兼業するかたわらで、王族の乳母としての役割も勤めてきた

現在は警察や軍隊に所属。警察音楽隊として儀式音楽を演奏したり、結婚式などの催しに招かれ、踊りの伴奏もする

ドムという呼称も差別用語だとして、「職人さん」（技能者）という呼び方に変わる

ポロ競技の際、試合の開催を告げる合図として演奏したり、試合の景気づけのために活躍している

◆音楽愛好家達（素人音楽家）の音楽

チトラルの人々は音楽好きで、チトラリ・シタール（Chitrari sitar）奏者を中心に音楽愛好家同士で集まり、音楽を楽しむ → 「シュトック」（集まり）

歌は、ほとんどが恋歌。参加者は指鳴らしか手拍子で、長-短のリズムを刻む

棒型太鼓「ダフ」（daf）や、ジェリー缶「ジルカン」（jirkan）を打楽器として用いることもある

音楽が盛り上がると、参加者のなかから有志が立ち上がり、踊りが始まる

最初はゆっくりだが、次第に熱狂的な踊りとなり、回転して終わる

◆宗教音楽

チトラル北部のイスマイル派は、宗教音楽を持つ

撥弦楽器ガルバ（gharba）の伴奏で、神への讃歌や宗教叙事詩を歌う

歌詞は、ペルシャ語の方言を用いることが多く、葬式などで歌われる

◆その他

狩りで獲物を仕留めた時の歌、鷹狩りの歌、子供の遊び歌、女性の歌う子守唄など

北部のマストゥージを中心とした地域に、独自の古い音楽が残る

ラスプール谷の「ノスティック」「パストック」など

●グローバル化時代における音楽の変容

◆外部からの影響

パキスタンの都会のポップスが若い人たちを中心に入ってきている

パキスタン（インド）の映画音楽やラジオ・テレビ番組／インドの衛星放送

欧米のポップスはまだほとんど入っていない

テンポが速くなり、リズムが単純化される傾向がある

古くからのゆっくりした踊りが好まれなくなる

若者が熱狂的に踊れることが目的。最終的に、ただぐるぐる回るだけ

スーフィー（イスラーム神秘主義）の神との合一につながるが……

南に住む有力なパシュトゥン族の音楽スタイルの影響

アルガニワル（アフガン風／パシュトゥンはアフガニスタンの支配民族）

大音量化 →シタールが大型化

みんなで集まって音楽をするため

◆社会制度の変化による影響

王制廃止で音楽のあり方に大きな変化

お抱え音楽家（ドム）がいなくなる

儀式・儀礼の音楽がなくなり、音楽は単なる娯楽になる

ドムの音楽を、スカウト（軍隊）や警察が演奏

イスラーム原理主義の台頭で、音楽をやるのがはばかりれる雰囲気が強くなる

音楽家を呼んで実施するパーティなどの自粛

Jashn-e-Chitral（チトラル文化フェスティバル）での音楽が禁止される

◆自文化に対する意識の高まりと観光資産としての活用

インターネットの導入と普及で、自文化を積極的に発信していくことが可能に

さまざまな「チトラルの音楽サイト」が登場

93年からオーストラリアの援助で小出力のラジオ局が開局

CD・DVD化……著作権なし・コピー天国のため、一気に普及

音楽家と店との軋轢や若い音楽家同士のライバル意識も

これまで一過性だった音楽を、時代を超えて共有できるようになった

伝統的な音楽を残そうとする動きの活発化と観光化の推進

シャンドウール峠における、ギルギット地区とのポロ試合

大統領も参列して、全国にテレビ中継

Jashn-e-Chitral（チトラル文化フェスティバル）の開催

ラスプール地区の伝統音楽保存会の活動

見せ物としての「カルチュラル・ショー」の確立

カラーシャ族の谷でも「ノスティック」「パストック」が知られるようになる

●パシュトゥーン人と部族地域の概要

◆パシュトゥーン人

アフガニスタン東南部とパキスタン西北部に住むイラン系の民族

アフガンで2集団、パキスタンで2集団に大別

アフガン側に1200万人、パキスタン側に2900万人？

アフガニスタン全人口の4割を占め、支配民族となっている

パキスタンでは約11%

言語はパシュトー語（インド・ヨーロッパ語族インド・イラン語派）

◆歴史

スレイマン山脈東部を故地とするイラン系遊牧民

10世紀頃にイスラームを受容

交通の要所を押さえ、勇猛果敢さと略奪の横行で周囲の諸民族に恐れられる

イラン（サファビー朝）やインド（ムガル朝）の支配を受ける

アフシャール朝から自立して、ドゥッラーニー部族連合がドゥッラーニー朝を打ち立てる（1747～1973）

シク教徒と、それに続くイギリスとの戦いが続く

南進するロシアとの「グレートゲーム」

3度にわたる「アフガン戦争」……1839～42、1878～80、1919

デュアランド・ラインの策定（1893）

1901年にカーゾン卿が「北西辺境州」（North West Frontier Province）を設置

部族地域の設置／辺境刑法の施行／相互不可侵協定

パキスタンの分離独立

旧部族地域は「連邦直轄部族地域」（FATA）と「州政府直轄部族地域」（PATA）に（憲法247条に明記）

普通選挙権は持たないが、上院・下院に議席を持つ

英領インド時代の辺境刑法や特権を継承

給付金（当時の5000万ルピー）や所得税免除

◆部族制の根幹であるパシュトゥヌワレイ（パシュトゥーンの掟）

パシュトゥーンの掟（道徳と慣習）を守ることが、パシュトゥーンの生き方

1. 勇気……原語は「刀」。パシュトゥン精神の象徴
 2. 戦闘の掟……勝利か死か。背の傷は不名誉
 3. 夜襲（ダーラ）……ゲリラ戦。急峻な地形の利用
 5. 避難（ヌナワーテー）……庇護を求めた者は敵であっても匿う
 7. 長上に対する尊敬……族長や責任ある地位に立つものに十分な敬意を払う
 8. 復讐（バダル）……損害は「借り」。同価値の損害を与えないと借りを返したことはない
 9. 聖戦（ジハード）……異教徒との戦い。とくに英国との戦い
 10. 集会（ジルガ）……重要問題を成年男子が討議する場。村→部族→民族（ロヤ・ジルガ）
 13. 誓約……約束を固く守る。「この頭が胴より離れるとも友との約を破らず」
 15. 決断……「パシュトゥンのイエスはイエスであり、ノーはノーである」といわれる
 21. 平等（ムサーワート）……パシュトゥー語には「召使い」「奴隷」の語はない。「長（ムシュル）」があるだけ
 22. 客人歓待（メールマスティアー）……来客は村の客として歓待する。「ここはあなたの家です」
 24. 旅行護衛（パドラガ）……旅行者の安全を確保する。敵対する村を通る際は中立の村の人間に護衛させると、手を出さない
 31. 家系と伝統の尊重……血統の純潔さを保つための親族内での結婚奨励。古老が昔の英雄譚を若者に話して聞かせる
- その他……4. 人質（バルマタ）／6. 戦争における婦人の役割／11. 講和（ルーガ）／12. 和約（ティーガ）／14. 忠実（イーマダーリー）／16. 不撓不屈／17. 民族愛／18. 自尊心／19. 大志／20. 自由（アザーディー）／23. 客に対する尊敬／25. 郷土愛と自衛／26. 民族の独立／27. 信仰（ディヤーナト）／28. 貞潔（パーキー）／29. 協調（イツティファーク）／30. 素朴（サーダキー）／32. 結婚年齢／33. 名誉（ナムース）／34. 家庭における女性の役割／35. 子弟の教育／36. 遊戯

◆他の諸民族（部族）との比較

南に隣接するバローチ（含ブルーフィー）人との違い

同様な部族法（リワージ）を持つ

敬虔なパシュトゥーン、不信心なバローチ

民主的（個人主義的）なパシュトゥーン、封建的（中央集権的）なバローチ

族長が宗教的権威を兼ねるバローチ

常に力を見せつけないと、その地位を失うパシュトゥーン

チトラル人やカラーシャとの違い

騎馬民族（遊牧民）のパシュトゥーン、定住民のチトラリー

略奪や暴力を厭わない勇猛なパシュトゥーン、軟弱な平和主義者のチトラリー

名誉に対する社会的価値観がチトラルでは低い（泣き寝入り）

チトラルでは女性の地位が高い

シーア派のイスマイリ派が多い

チトラル人としてのアイデンティティが薄い

◆9.11後の「テロとの戦い」の開始

2001年11月、アフガン戦争で戦闘員（アラブ系・中央アジア系）が流入。12月、米軍に呼応してパキスタン軍が独立以来初めてFATAに進駐

2003年12月、ムシャラフ大統領暗殺未遂事件。2004年頃から、アフガニスタンのタリバンの影響を受けた武装勢力が台頭（→パキスタン・タリバン）

2004年3月、アルカイダNo.2のザワヒリ拘束をめざし、パキスタン軍が南ワジリスタンのワナに侵攻し、激しい戦闘（ワナの戦い）

2004年4月、パキスタン政府と三つの武装勢力が和平協定。しかし6月に米軍が無人機によるミサイル攻撃を実施し、リーダーのネック・ムハンマドを殺害。バイトゥッラー・マフスードが跡を継ぐ

2006年10月、米軍とパキスタンがバジョールのマドラサ（宗教学校）を攻撃。「パキスタンタリバン運動」（TTP）発足への布石となる。スワートではファズルッラーがFMラジオ放送を開始

2007年7月、イスラマバードのラール・マスジッドに治安部隊が突入。スワートではファズルッラーがシャリア法廷を導入。12月にはパキスタンタリバン運動（TTP）の存在を公表。大統領候補のベナジール・ブットー女史暗殺

2008年5月、ファズルッラーが率いるタリバン過激派、北西辺境州政府と16カ条からなる和平協定を締結。自爆攻撃や政府関係機関に対する攻撃の中止を約束

2009年2月、アフガン・タリバンの要請を受け、路線対立を停止して「統合ムジャーヒディーン評議会」を結成。8月、バイトゥッラー・マフスードが米軍の空爆で死に、弟のハキムラールが跡を継ぐ。自爆テロが活性化し、シーア派、アフマディーヤ派、スーフィーなどの民間人

も標的となる。

2010年、米英がTTPを国際テロ組織に指定

2011年5月、アボタバードに潜んでいたアルカイダ首領のオサマ・ビンラディンを米特殊部隊が殺害

2012年10月、マララ・ユースフザイ殺害未遂事件

2013年6月、ナンガパルバット登山のベースキャンプを襲撃して、外国人登山客10名死亡

2013年11月、ハキムラー・マフスードが米軍の無人機攻撃で死亡。後継者としてモーラナ・ファズルッラーが選ばれる

2014年1月、最も勇敢な警官として知られるチョードリー・アスラムを殺害。6月のカラチ国際空港襲撃事件にも関与。10月、有力幹部が「イスラーム国」参加に入ると表明

◆深刻化した理由

100年以上うまく機能してきた英領インド政府とパキスタン政府の懐柔策

1978年のソ連のアフガン侵攻で一変

過激派（アフガン人／アラブ人／ウズベク人）の流入

ムジャヒディン（聖戦士）の供給地

大量の難民の流入

ジアウル・ハック政権（1978～88）時代のイスラーム復興

◆マララ・ユースフザイ

1997年7月12日、パキスタンのスワート県、ミンゴーラで生まれる

2009年（11歳）、BBC放送の依頼でタリバン支配下にあった人々の状況をペンネームでブログに投稿し、タリバンによる女子校破壊活動を批判。パキスタン軍の軍事作戦でスワートからタリバンが追放された後、政府が本名を公表して「勇氣ある少女」として表彰

2012年、銃撃事件において、タリバン勢力に頭部を銃撃され、イギリス・バーミンガムに搬送。奇跡的に一命をとりとめる

2013年1月に退院し、同月9日にシモーヌ・ド・ボーボワール賞を受賞。7月12日には国際連合本部で演説をおこない、教育の重要性を訴える（マララ・デー）。同年10月にはサハロフ賞を受賞

2013年12月、ユネスコとパキスタンは、就学機会を奪われた女性の教育を支援するマララ基金の設立。『わたしはマララ——教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女』刊行

2014年、ノーベル平和賞を史上最年少者として受賞

◆無人機（UAV）問題

人権団体（アムネスティ・インターナショナルとヒューマン・ライツ・ウォッチ）から批判

国際法に違反し、戦争犯罪の疑いがある

2004年から米軍がパキスタンで行った無人機攻撃が330回におよび、その結果約2200人が死亡し、そのうち少なくとも400人が民間人だった

無人機操縦を担当する兵士が心的外傷後ストレス障害（PTSD）に苦しんでいる

「戦争と平時」の二つの世界を行き来する切り替えができない

パキスタンの主権を侵害しているとして、反米感情が極度に高まっている

◆パキスタンとしての課題

まずは、停戦

政府、軍、派閥相互間の信頼の醸成

各派閥のリーダーを無人機で殺害しているので、交渉相手がどんどん小物になっていく

社会開発の停滞を少しずつでも改善していく

インフラ整備……道路、水道、公的機関、河川管理、旱魃対策

保健衛生……病院、医師・看護師の養成、女性保健婦の養成

公的な初等教育の普及……学校新設、教員養成、女性の教員登用

外国の資金（サウジ、UAEなど）によるマドラッサ（宗教学校）の増大への対処

資源の開発

水資源（灌漑システム）

鉱物資源（宝石・貴石、大理石）

ケシ栽培と闇経済への対応

栽培面積の増大への対処

アフガン通過貿易協定見直しと地下経済への対処

女性の地位改善と教育

女子の就学率の向上

女子校襲撃問題（マララさん問題）への対処

過激主義との戦いと対米政策

日本以上の対米従属国家であるという国情

軍内部の過激主義勢力のコントロール

米国どこへ：無人機パイロットの告白

毎日新聞 2015年01月06日

米軍がアフガニスタンやイラクで「テロリスト掃討」を目的に実施してきた無人機空爆作戦で、実際に無人機を遠隔操作して攻撃に参加した元米空軍操縦士、ブランドン・ブライアントさん（29）が毎日新聞の取材に応じた。自宅がある米西部モンタナ州ミズーラの喫茶店で「テロとの戦い」について語った。ブライアントさんは、「敵がどうかとも分からない多数の人を殺害した。自分の過去は変えられず、悔いても悔いきれない」と、除隊から3年以上たつ今も自責の念にかられている。

ブライアントさんは、米西部ネバダ州やニューメキシコ州にある米軍基地に勤務し、約1万キロ離れたイラクやアフガン上空を飛行する無人機を遠隔操作していた。1日10時間以上の勤務を続け、飛行時間は延べ6000時間以上。目標地点や特定人物の監視から米兵車両の移動を上空から見守る護送、さらに交戦する地上部隊の支援から空爆まで約4300もの任務に携わった。除隊するまで約5年間で、直接ミサイル攻撃で殺害したのは13人。関わった任務すべてで殺害した人数は1626人という。

今も鮮明に頭に焼きついて離れないのが2007年1月の爆撃だ。アフガンで駐留外国軍を銃撃する旧支配勢力タリバンメンバーらに対し、空対地ミサイル「ヘルファイア」を撃つよう指示された。2人1組の任務で、ブライアント氏が武装集団にミサイルを誘導するレーザーを照射し、もう1人の操縦士がミサイル発射ボタンを押す。初めての爆撃指示だったため上司に抵抗したが、「合法的な命令であり、従うように」との上官の言葉で議論は打ち切られた。

操縦席に着いて任務が始まると、状況が変わった。米軍のF16戦闘機が丘の頂上付近から銃撃していたタリバンメンバーらをめがけて空爆を実施。このため作戦は突然変更され、付近の別の地点を監視するよう指示が出た。男性3人が現場方向に向けて歩いているのを発見すると、攻撃して殺害するよう命じられた。

「聞こえるのは、ミサイルを撃つためにボタンをクリックする音だけ。ミサイル発射の時の衝撃波音も、標的に当たった爆発音さえ聞こえない」

レーザー誘導されたミサイルは標的を破壊し、着弾後の煙の中から鮮明な画像がモニター画面に映し出された。バラバラになって即死した2人と、右足を吹き飛ばされ、血を流しながら足を押さえてのたうち回る男性の姿だった。ブライアントさんは男性が動かなくなるまで画面を見つめ続けた。むごたらしい画面を見なければならぬのは「他の誰かが来て、遺体を拾いにくるかどうかを見る」ためだった。集まってくる仲間をさらに攻撃するためだ。

「今となっては、彼らは敵だったのかさえ分からない。悪い時に、悪い所にいただけの市民だったのではない。誰なのか、どこから来たのか、何が目的だったのかも知らない。ただ命令に従い、私は彼らを殺した」

ブライアントさんが無人機を遠隔操縦していた米軍基地内の場所は、「コンテナ」と呼ばれる窓のない長方形の建物だ。コンピューター機器を冷やすファンの音だけが静かに響く暗い部屋には、操縦士と副操縦士の席が横に並び、14個のモニター画面だけが怪しく光っていた。

100人以上が「どこか」で同じモニター画面を見ており、指示を出してきた。空爆命令が出ると、コンテナの外で「命令」「許可」などのやりとりがなされたうえ、最後にコンテナの2人に「撃て」という命令が下りてくるのだった。

週6日の基本的な勤務は、その日の任務についての30分の事前ブリーフィング▽4時間半の操縦任務▽1時間の昼食休憩▽4時間半の操縦任務▽30分の後ブリーフィング▽2時間の事務作業——という、休憩を挟んで計12時間だ。コンテナの外に出ることはない。人手不足から、約5年間の操縦士としての勤務のうち最初の4年は休暇もとらなかった。

だが、ブライアントさんは「自分が人を殺せるなんて思っていなかった」と語る。入隊した05年、無人機を操縦してイラクやアフガンで爆撃するとは想像もしていなかった。画像情報アナリストとして画像情報の収集、分析をしていたはずが、いつの間にか無人機のカメラとミサイル発射のためのレーザーを操作する副操縦士になっていた。「知らないうちに引きずり込まれた」

入隊の翌06年4月に無人機プログラムの訓練に参加したブライアントさんは、その年の12月には初めての無人機操縦の任務についた。イラクでの米軍車両の移動の安全を上空から無人機で監視するものだった。しかし、ブライアントさんの初の無人機での任務は悲惨なものとなった。

ブライアントさんが米軍車両の進行方向はるか前方にあった路面の異変に気づきながら、情報は車両に適切に伝わらなかった。モニター画面の前で、車両は地面の即席爆発装置（IED）で爆破され、米兵が死亡したのだ。「私の精神は打ち砕かれた。二度と同じことを繰り返すまいと努力し、同じことは起こさせなかった」。ブライアントさんは無人機について徹底した勉強と情報分析にのめり込むこととなった。

× × ×

ブライアントさんは今、心的外傷後ストレス障害（PTSD）に苦しんでいる。「秘密の任務」のため、誰にも話すことができず、「戦争と平時」の二つの世界を行き来する切り替えができなかったという。

たどり着いたのは、民間団体「プロジェクト・レッド・ハンド」を設立し、無人機による戦争の実態を語り始めることだった。「私がこれまでしてきたこととのバランスをとりたい」という願いからだという。今後は、戦争をゲームのように「格好いい」と考える子供たちがなくなるよう、ゲーム会社などに働きかけていく考えだ。

無人機による攻撃はしばしば「見えない戦争」と呼ばれる。しかし、ブライアントさんは異議を唱える。「このような形の戦争は『見えない戦争』ではなく『臆病者の戦争』だ。軍人の気質を、米国の規範を破壊し、ただ新たな恐怖を生み出している」

ブライアントさんによると、13年に米誌の取材を受けた際、雑誌社が取材内容の確認を米国防総省に問い合わせた。同省は「彼は正しいことを言っている」と回答したという。（西田進一郎）

× × ×